

今回の震災で犠牲となられた皆様のご冥福をお祈りするとともに、被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。

想定を超える災害だったと言われる。科学技術を尽くしてきたはずの想定をあっさり超えられた事実謙虚になるほかに、同時に、科学技術の探求には恐らくゴールはないのだと感じる。

ゴールがないだけに、研究の見極めは難しい。私は以前、ライフサイエンス系の競争的資金、広く研究課題を募り、提案された課題について、科学的・技術的な観点で審査を行い、科学的価値や必要性が高いと判断されるものを採択し、資金を配分する事業に携わった。社会科学と自然科学とは、その本質が違うし、システムも環境も異なろうが、ともに政策研究ということで通じる点もあるのかと駄文を供したい。

自然科学の分野では、平成7年度以来累次の科学技術基本計画の下で、競争的資金が拡充を続け、(古いデータで恐縮だが)平成19年度予算の時点では4,766億円、科学技術関係予算の14%を占めている。

その運用において、選考・採択がキモであることはご想像頂けよう。私が携わった事業でも、大規模な課題だと5年間で億のオーダーに及ぶこともあり、勿論金額の多寡に拘らず、貴重な予算の配分に肝を冷やした。

もう相当前のことなので、今のシステムはもう変わっているかもしれないが、当時試行錯誤を重ねたのが、科学的・技術的優位性と政策目的との兼合いである。

その事業では、課題の選考は、研究者等10数名の方々に組織する委員会で判断して頂いていた。委員は、様々な分野の第一人者にして研究管理・組織管理の経験も豊富な面々である。

我々事業運営側も提案課題の面接審査や選考の議論に参加はするが、選考順位はあくまで専門家である委員の投票で決定する、いわゆるピア・レビュー方式。この方式は、当時、競争的資金一般で押し進められていた。これには科学的・技術的観点重視とともに恣意的選考防止の目的もあった。

当時、この事業には、政策目的への寄与と、確実な成果とが強く求められていた。政策の一環としての研究事業であり、厳しい財政事情の下で予

算を使っているのだから当然である。

とはいえ、この要請と科学的・技術的優位性との両立がなかなか難しい。

科学的・技術的に優れた研究は、多くの場合困難で不確実性も高い。また、基礎的で応用性・発展性に優れた研究には、特定の政策分野との関連性が希薄にならざるを得ないものもある。

一挙解決の妙案があるわけもなく、できることから始めようということで、まず応募者に事業の趣旨・政策目的を周知徹底し、応募書類でそれとの関連性を明記してもらうこととした。同時に、選考に当たる委員の先生方にもこの点を十分配慮して頂くよう要請した。

次の年に行ったのは、事務方から委員への参考意見の提示である。事業運営に関わるスタッフ総出で議論の上、応募課題のうち事業趣旨・政策目的と関連がないと考えられるものについては、その旨に理由を付し、参考として委員にコメントした。

正直最初は、委員の判断を縛ることになるのではないかと、何しろ各分野の第一人者の皆様、御不興を買わないかとの不安もあった。

が、逆に歓迎された。委員の方々も、政策目的の観点は悩ましかったのかもしれない。第一人者と目される人こそ、自分の専門分野の価値観に拘らずに視野が広く、判断を客観的たらしめようと努められているのだと実感した。

更に翌年は、逆に政策目的への貢献が大きいと思われるものもコメントした。

今思えば、科学的・技術的優位性と政策目的への寄与との「よい塩梅」に向け、委員の先生方と事務方とで試行錯誤しながら一歩ずつ進めて来た感がある。

これらの積重ねで、少なくとも応募者への趣旨の徹底は果たせたようだ。ある年、選考の審査会場近くで、応募チームが事前打合せをしており、「政策目的との関連を強調する。その方が採択されやすい。」と話し合っているのを偶然職員が見かけた。

採択されんが為の作り話をされては困るが、数年前、応募書類の政策目的との関連性の欄に「特になし」と堂々と書いてあるものがあった時代に比べ随分と意識が変わったと、少し嬉しかった。